

# 生活科における体験活動を通して育まれる自立性に関する研究 — モンゴルの「人間-自然」への発展を目指して—

エンフタイワン・ウーガンチメグ  
(発達教育科学専攻 生活科教育領域)

## 1. 論文構成

- 第Ⅰ章 研究の目的と方向
  - 第1節 研究の目的
  - 第2節 研究の方向
- 第Ⅱ章 モンゴルの「人間-自然」の課題
  - 第1節 モンゴルの教育制度について
  - 第2節 「人間-自然」の背景と経緯
  - 第3節 「人間-自然」の年間指導計画・指導案分析
  - 第4節 「人間-自然」の課題と方向性
  - 第5節 モンゴルの「人間-自然」と日本の教育課程との比較研究による考察
- 第Ⅲ章 日本の「生活科」の学習指導要領の変遷
  - 第1節 生活科創設の経緯と流れ
  - 第2節 生活科学習指導要領の改訂毎の特徴
  - 第3節 新学習指導要領の捉え
  - 第4節 生活科の30年の成果と今後の方向性
- 第Ⅳ章 体験活動を自立性の育成につなげる
  - 第1節 体験活動とその重要性
  - 第2節 体験活動を自立性につなげる視点
  - 第3節 自立性の育成に関連する道徳的な視点
- 第Ⅴ章 生活科実践の授業に関する検討
  - 第1節 第1学年「あきはかせになって、あきとあそぼう」の分析
  - 第2節 第2学年「ウズラさん、ぼくがパパだよ、わたしがママだよ」の分析
  - 第3節 第2学年「『とぼそう、あそぼう』2の2ロケット」の分析
  - 第4節 実践の授業を通して明確化した視点
- 第Ⅵ章 「人間-自然」の授業デザイン
  - 第1節 「人間-自然」の授業デザインの捉え
  - 第2節 「羊とヤギとなかよく」の実際
- 第Ⅶ章 研究の結論とこれからの課題

## 2. 研究の目的

本研究では、モンゴルの学校教育の問題や、低学年の「人間-自然」に関する課題を明らかにする。そして、「人間-自然」への授業改善を目指すに当たって、生活科の学習指導要領の変遷やこれまでの経緯を辿る。生活科における体験活動の

重要性と体験して生まれる自立性の育成に目を向ける。体験活動に没頭している児童の姿、態度などから気付きや成長の視点を導き出す。さらに、実践の授業を分析して考察する。それらを踏まえ、児童の成長を促す体験活動を学習に取り入れた授業をデザインすることを目的とする。

## 3. 研究の概要

### 第Ⅱ章 モンゴルの「人間-自然」の課題

「人間-自然」は新設されて13年が経過しているが、現段階では充実した学びとは言えず、成果が挙がっていないことを問題提起としたい。その要因の一つとして、教師と児童の双方において教科に対する意識が低いことが挙げられる。体験活動が行われているとは言い難い。それは、読み書きを一方的に教え込むような指導を教室で行われているからである。自然認識を理解して終わることが明らかになり、児童の役割が少ないことと、教師の主体性が先に進んでいる状況がある。そのため、児童の知的な気付きを促す具体的な体験活動の構成、児童の思考力・表現力を充実させる教師の手立てと児童が互いに協同的に学び合う学習の設定が必要である。

本研究を踏まえた上で、「人間-自然」でどのような学習内容を取り入れるか。体験活動を行うことでどのように自立性を育成させていくのかを探り、児童の成長をどのように達成させるのかを明らかにすることを狙っている。

### 第Ⅲ章 生活科の学習指導要領の変遷

生活科のこれまでの経緯と変遷について年代毎に取り組んで、特徴を見出した。生活科が新設されたことは知識だけではなく、体全体で体験する学習を展開することであった。体験活動を重視するようになったことで、児童が主体的に学ぶようになったのである。しかし「活動しているだけで、どのような学びが成立しているのか分からない」<sup>1</sup>といった批判は後を絶たない。そういった観点において、体験活動を学びに価値付けていくことが注目され、児童の気付きの質を高めることや、

自分の成長を気付くまでの充実が必要になってきたのである。

平成元年の新設時に、自分の問題を乗り越え、児童が自ら考えたり、自ら対象とかかわって感じたりすることができるようにできると気付きを促していきことができるようにしていた。また、人と人とのつながりをつくる力を育てることは大切な視点であった。つまり、児童の心を新しい関係につなげるように教師が支援し、心の準備ができるような精神的な自立が深く育成されていたのだと捉えることができる。精神的な自立を見取る視点は、遊びや体験などを通して楽しみがあり、喜びがあり、心が動いてとりわけ自分を見つめ、自分自身への気付きとつなげていくことである。

平成10年の改訂では、児童の一人一人の個性を生かす教育の充実が求められ、「人と人とのつながり」が「人々」に変わり、対象を一体的に捉えることと、児童が体全体で実感していくような児童の主体性が要求されたのである。それは、自分で「できないもの」を「できるようになる」ために必要な技能や習慣を身に付けながら、知的な気付きを深めていくことである。

新しい対象とのかかわりを得て児童の態度を育て、自分のことを考えることだけではなく、人とのつながりを意識して他者のことを深く考えていくことも重要であった。また、校外での活動の充実が直接的な働きかけが重視されて、直接的に体験することは楽しく遊びながら心に刻んでいくことは、児童の心を育むということである。これらは精神的な自立への芽生えにもなり、知的な気付きという視点で児童の知識を学習上の自立につなげることができるように考える。

平成20年の改訂では、引き続き体全体で参加できる体験活動の充実が求められた。体験活動を遊びだけで終わらないよう、学習へとつながることには、教師の役割を果たすことが重要である。教師は、児童の資質・能力の発達を促し、児童が自ら考えながら主体的に参加できる手立てが必要である。児童が諸感覚で感じたことを自分の生活に生かしながら、自分の成長に気付くことが重要な視点で、生活上の自立性につながることで改善された学びだと言える。

学習指導要領の変遷から、生活科の体験活動とは、児童に日常生活の資質・能力や様々なものの使い方ができる技能や習慣を身に付けさせるので

ある。そこで、児童の成長に気付かせ、徐々に自立性を育まれていくことができる。自立とは身に付くものではなく、体験活動を終わった後も生活の習慣になることで、児童が体験したものを自分の能力にして、生き方に生かして自立性を育成されていくものと想定できる。例えば、毎朝元気に挨拶できるようになったことでも、自分のできるようになったことを他人に教えることでも、自ら行動したり相手のことを考えたりすることでも、全てが自立性につながっていくのである。

#### 第IV章 体験活動を自立性の育成につなげる

##### (1) 体験活動の重要性

中野によれば、生活科における体験とは、「人が生きる主体者として、自分を取り巻く何らかの環境と密接にかかわり、自らの五感や行動を通してこれと受け答えし合ったり、作用しあったり、影響し合ったりして、何らかの自己変革を可能にすることである」<sup>2</sup>とされる。これは、対象と何度もかかわり、関係を深めたり、児童が自ら主体的に行動したりすることで、諸感覚がじっくりゆっくり児童の心の中に浸み込まれていくことが期待される。体験活動を通して生まれた学びは、児童の認識から簡単に忘れ去られることはなく、長期的に心に残る学びとして児童の中に深く刻まれていくのである。平成元年の創設以来、教科目標に「具体的な活動や体験を通して」の文言が変更されず明記されてきたことから体験することの大切さが揺るぎないものだということがわかる。

児童が対象に働きかける直接体験は、児童が諸感覚を使って気付きを高めることができる。直接体験では、楽しく遊びながら主体的な学びを位置付けることが期待できる。

高岡によれば、「直接的な体験を重視することは、学ぶことの楽しさや成熟感などを体験させることができるとともに、学習や生活の意欲を育て、主体的な態度を身に付けさせることになると考える」<sup>3</sup>とされる。要するに、直接的な体験こそが、生活科の学びとして成立し、直接的な体験を通して児童に面白さや成長を実感させることができるのである。

体験活動の特徴は、児童が自ら考えて主体的に参加することであり、他者と協力することにより自分の言葉で考えを伝えることができるのである。さらに、児童にとって意味がある体験は長期記憶

として知的に内在し、忘れられない学習になり得る効果が期待できる。体験活動を通して、徐々に連続的に興味・関心が生まれてくる。体験は児童にとっての学習や教師にとっての経験として有効な学びとなる。児童も教師も互いに学び合う関係によって体験活動が構築されるのである。体験することは、児童と教師が学び合う場であると捉えることができる。要するに、児童が学ぶことだけでなく、教師も同様に学び、経験を積み重ねていくことができるのである。

児童は体験を通して様々なことを経験していく。経験とは、実際に足を運び見たり聞いたり触れたりすること、つまり、諸感覚に基づいて未だ感じたことないことに気付いていくことである。体験活動は生活科に不可欠で、そこから得られた成果と失敗が児童にとって経験となる。そういった経験の積み重ねから自立性が育成されるのである。その経験を踏まえて生活科の学びが単元を通して次々につながっていくと、より一層充実した学習活動になる。

児童の諸感覚を存分に発揮させられる体験活動の重要性は、児童は体全体でより深く感じ、気付いていく学びである。そこで、体験活動をどのように単元に位置付け、学びとして発展させていくのかを教師は真剣に考える必要がある。それは、教師の児童に対する働きかけによって、児童が自ら考えられる、児童の興味・関心を促すことが大切なのである。

体験活動を通して児童は体で様々なことを感じる。その自ら感じたことで気付きの質が高まり、自分の成長となっていける。このようなプロセスを経て、児童の自立性の育成につながっていくのである。さらに、児童の気付いたことや学んだことなどを教師が価値付けていくことで児童の自立性はますます強固なものとなって育成されていくのである。

## (2) 低学年の自立性の定義

低学年で育む自立への基礎とは、大人に要求される自立ではない。児童の諸感覚の涵養のために、見たり、探したり、作ったり、調べたり、体験したりすることは、体全体で学んで成長していくことである。そのため、低学年で育まれる自立性とは、簡単な作業、学校での片付けや家庭の仕事に手伝うことなどができるようになるものである。

自ら学習をする意欲・態度が育つこともできるし、粘り強く児童、他者を尊重する児童、なかよく活動する児童が育成されていくことである。全てが低学年の自立性の見方だと捉えることができる。

ここで「生活科の自立性とは、単元の中で児童が対象とかかわって感じる、気付くことだけで終わるものではなく、それらを体験活動の後にも自分の生活に活かすことである。このように児童の生活に密着した資質・能力であり、多様なものや人とかかわるときに使用され、自分の生き方が充実していくものである」と定義したい。

## (3) 自立性につなげる視点

森隆が生活科を「無意識的予習」と定義付け、「具体的な活動や体験を通じて関心をもったり、考えたりしたことが、そのときは分からなくても、将来の学習に役立つと考えられるからである」<sup>4</sup>と述べている。ここから言えることは、低学年の段階において自立性がどこまで育成できるか明確ではないが、教師が体験活動を通して児童に無意識のうちに自立性が育まれていくことを想定する

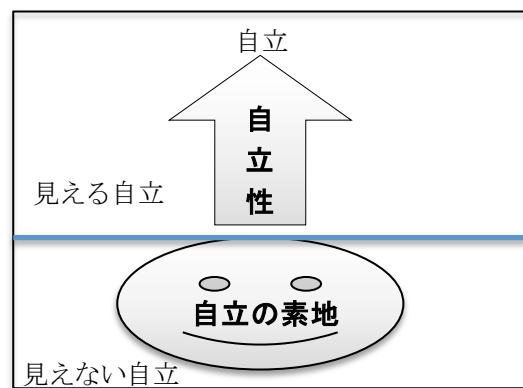


図1 「見えない自立」から「見える自立」ということではないか。

生活科の2年間の学習を通して、自ずと自立性の素地は育成されるはずである。自分の生活や生き方に活かせる資質・能力を身に付け、今後の学びや人生に活かせるような自立までつなげていくことを求める。

「見えない自立」に生活科で身に付く児童の自立への素地が隠されており、そこから徐々に児童の「見える自立」へと促されていくのである。児童が「見えない自立」から「見える自立」までに成長するには体験活動が大きなかけ橋となる。「見える自立」では、徐々にできるようになることが増え、それが長期的につながることによって人間性の自

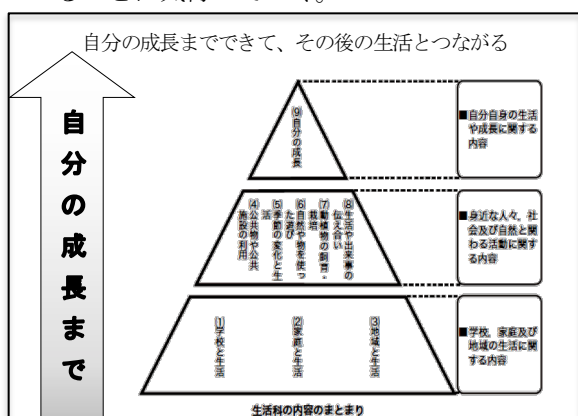
立という段階までいける。ただ、体験して終わりというだけではなく、児童の学びとして価値付けていくことが、今後の児童の生き方と結びつけられるようになる重要な視点である。例えば、体験しても児童に気付きが生まれなければ図1に示した自立性につながらず、「見えない自立」だけで終わってしまう。低学年の生活科で学んだことはその場ですぐ見えるものではないが、その後の学習場面や生活、さらには他教科の中でも見ることができると可能性が高い。そのように、児童の生活の一部で表れるようになることで「見えない自立」から「見える自立」へと接続し、充実していくことである。そのように考察することで、生活科の効果はすぐには表れないということが言及できる。また、そうした目に「見えない自立」への基礎を養うのが本来のねらいであると捉えてもよいだろう。

## 第V章 生活科の実践の授業検討

大学院生の2年間で生活科を中心に17本の授業を参観した。その中の三つの授業を分析した。ここでは紙面の関係上、第2節の第2学年、「ウズラさん、ぼくがパパだよ、わたしがママだよ」の実践を分析する。

本授業は、平成30年5月29日に愛知教育大学附属名古屋小学校の2年4組で行われた公開授業である。ウズラを大切に、生命に気付き、さらにその小さい生命を守ることにつながる授業で、自分とのかかわりを深めることを目的としていた。児童が体験活動をするときにウズラとの世界に入り込み、ウズラと自分を一体的に捉えて行動し、生活を共にしているような児童の温かな気持ち伝わる授業であった。

本単元のねらいは児童の主体性を促し、自ら考え、ウズラを通して動物の生命に気付き、動物に関する考えを深めていくことである。また、小さいウズラと同じく自分も様々な人々に支えられていることに気付いていく。



## 図2 「自分の成長の意識」

単元を終えて学んだことを生活に生かし、新しい自分や自分の成長に気付くことができるのは、生活科の内容(9)につながる。筆者は、生活科の全ての内容において図2のように「自分の成長」まで意識して実践する必要があると考える。

本単元のねらいを読み取ると、自ら学びに向かい、わかるようになったことなどをこれからの生活に生かすことを大切にしている。生き物とのかかわりから、児童の学びを主体的に価値付けていくことと、様々な人とのかかわりで人間性も深めることができるようになることである。

単元計画は20時間で設定されていたが、実践を終えた後もウズラは教室の中で児童と一緒にいた。これは、ウズラが児童の生活の一部になっていることを表している。

本実践では、ウズラを育てていくことを目標としていない。ウズラを通して、生命尊重に気付かせることと、ウズラの世話をしながら児童の主体的な活動を引き出すことをねらっているのである。さらに、その学びの特徴とは、児童が遊びながら主体的に体全体で参加し、他者と交流していく楽しさも味わっていることと、児童の心が大きく動いていることである。

児童の「自分達が育ててきたウズラを喜ばせたい」という願いを生かしながら実践を進めていくことで、次時の実践では充実したウズランドの工夫をすることができるようになる。児童たちはウズランドをつくるための物の材料や大きさ、形などの工夫をして自分の言葉で伝え、絵などで表現して話せるようになっている。それに、ウズラのことを考える中で自分の親のことも考える経験ができ、思いやりの気持ちが育っている。それらは、全て成長している児童の姿であり、道徳的な視点も育みながら、児童の自立性が育成されているのである。

### (1) 自立性における道徳的な視点

ウズラを元気に生きていかせるために児童がウズランドをつくったり、色々な世話の仕方を考えたりすることは思いやりの気持ちが育っている姿で、生命尊重の視点で道徳とつながるのである。これは、道徳性が養われていることで、生活科で目指す自立性の育成につながる点である。

児童の「自分達が育ててきたウズラを喜ばせたい」という願いを生かしながら実践を進め、次時の実践で充実したウズランドの工夫をすることができるようになる。ウズランドをつくるための物の材料や大きさ、形などを工夫して自分の言葉で伝え、絵などで表して話せるようになっている。それに、ウズラのことも考えるし、親のことも考えることができているので、思いやりの気持ちが育っている。それらは、全て成長している児童の姿で、道徳的な視点だと捉え、さらに自立性が育成されているのである。道徳性の視点を意識することで、より生活科で目指す自立性につながっていくのである。

## (2) 実践授業から明らかになったこと

児童が次の三つの学び合いができているということがわかった。それは、対象との学び合いと教師と児童の学び合い、児童同士の学び合いである。生活科のこれらの学び合いから児童は生活科で成長し、自立性が育成されていくことができる。

まず、対象との学び合いについて述べる。例えば、ウズラの実践では、生き物が対象になる。その生き物や動物とかかわり、生命尊重や愛着が生まれることができる。ロケットをつくる実践では、新しい遊びを考え、創り出しながら自ら工夫して思考力を高める。対象とかかわることで深めた意識は、児童の成長につながり対象との学び合いになりがちである。重要なのは対象とかかわりながら身に付けた技能や習慣、資質・能力などは単元が終わっても持続していることである。児童の生活やその後の生き方につながり、自立性が育成されている視点である。

次に、教師が児童と一緒に学び合いができることである。体験活動で遊んでいる児童に学びを価値付けることは教師の重要な役割である。児童が教師の受け止めや働きかけ、引き出し、問いかけなどから気付きを高めて学んでいくのである。教師も対象と初めてかかわることがあり、児童と一緒に考えたり、学んだりする。例えば、ウズラの実践の場合は、入谷教諭が、「ウズラの体験をしたこともないし、他の動物とかかわる実践もしたことがなくて、児童と一緒に学んできた」と実践をふりかえっていたのである。

最後に、児童同士の学び合いである。体験活動を通して、「わかった、できた」という喜びをも

てる児童の姿がウズラを抱っこしている嬉しい顔から見られた。生活科の実践では、知識だけではない、人間としての成長を目指すことを重視した授業が展開されている。そうして、ウズラの実践を通して児童が多様な技能や習慣を身に付けることができるのである。

また、児童同士で互いのよさを認めたり、自分の意見を伝えたりすることで、自分の役割を自覚し、より広がるような学びに向かう気持ちももてる。児童同士やグループ活動での気付きを大切にしていくことで、新しい友達との関係をつくることもでき、人とかかわりを広げていくことができる。友達から認められたり、褒められたりするかかわりの中でも人間性が高まり、自分の成長に気付き、意欲的に生活しようとする気持ちをもつことができる。このように児童同士の学び合いから児童の成長がよりよく上達し、自立性につながるのである。

## 第VI章「人間-自然」の授業デザイン

本章では、生き物を対象としながら「人間-自然」の24時間の授業をデザインし、12、13時間の授業を本論で詳細に述べている。

本研究における授業デザインとは、「人間-自然」には存在していなかった課題を、本研究で明らかになった視点に照らしながら、児童の自立性を促す学びを位置付けて、新しくつくり上げることであると考えた。

また、授業のねらいを教師の「教えたい立場」から捉えるのではなく、児童の「学びたい立場」から捉えることで提案できると「人間-自然」に関しての授業デザインに意味がある。

「人間-自然」の授業デザインの特徴として教材化されていないものを教材化することである。それは家畜とかかわる体験活動を取り入れることである。

モンゴルにとって家畜とは、身近な存在である。モンゴル人が生計を立てる際に大きな役割を担っている生き物だからである。従って、「羊やヤギとなかよく」という授業を設定する。本単位を通して、生き物を愛する気持ちや、人間にとっての生命の尊さを実感する気持ちをもてる、自分の心を整える児童の姿を展望したいことを授業の価値として、体全体で主体的に参加する態度を育成す

る。さらに、児童の生活に家畜への感謝の気持ちをもたせたい。

#### 4. 研究の結論と今後の課題

本研究の目標を設定し、「人間-自然」の課題を明確化し、第Ⅱ章では、生活科と「人間-自然」の年間計画や指導案などを比較した。比較研究を通して、モンゴルの学校現場で児童中心の学習活動が不足していることと、体験活動を新たに取り入れる必要があることを明らかにした。授業の学習過程は、教師の活動が多く、学習者の主体性を促す活動が非常に少ないことが明確で、児童は教科書だけとかかわり、教室で教え込みを中心に授業をすることが大きな問題であった。

第Ⅲ章では、生活科の変遷や経緯を考察し、平成元年から現在までの変遷、また、体験活動を年代毎に検討し、重要な視点を見出した。

第Ⅳ章では、体験活動の重要性や自立性の育成につながる視点、さらに道徳的な観点についても軽く触れた。

第Ⅴ章で生活科の実践授業を分析し、体験活動を通して学び合いができていたことがわかった。

第Ⅵ章では、モンゴルでの実践を考え、家畜を対象とした授業を提案した。

以上を踏まえ、本研究をふりかえると、教育とは教えることだけではない。学び合って進むことである。その手がかりとして、体験活動を設けていく必要がある。学びの中に体験活動を取り入れることは、児童にとって、体や心の動きを活性化するとともに、様々な技能や習慣を身に付けさせることに有効であることを明らかにした。ここで言及する体や心の動き、技能や習慣などが児童にとっての学びの展開とつながり、これからの児童の生活に生かされる出来事や問題などに向かって乗り越えていくことができる。このプロセスこそが体験活動を通して生まれる自立性の育成につながるのである。

#### 【註・引用文献】

1. 野田敦敬他『小学校学習指導要領の解説と展開 生活編』教育出版 2008年 p.8
2. 中野重人編「活動と体験」『生活科事典』東京書籍 1996年 p.220
3. 高岡浩二「小学校教育の改善の方向」『初等教育資料 1988年2月号』文部科学省 1989年 p.28

4. 森隆夫『生活科の基礎・基本』エイデル研究所 1991年 p.15

#### 【主要参考文献】

- 教育フォーラム「人間教育研究協議会編『自分自身への気付き』」金子書房 1990年第8号
- 田宮緑「生活科・飼育単元における学習過程と子どもの思考の変容」、『せいかつか&そうごう』第25号 日本生活科教育学会 2018年 pp.58-67
- モンゴル文部科学省『低学年の「人間-自然」の学習計画実施勧告』ウランバートル市 2014年
- 筆者がモンゴルで教師の仕事をしていた経験や娘の通っていた学校の授業参観及びその学校から取り寄せた資料を基に明らかにしたことである
- 中野重人監修・重田勉編著「How do 生活科『全指導案と活動・体験の工夫(2学年)』」1989年 東洋館出版社 p.2
- 学習指導要領 小学校生活科 新旧対照資料 2017年 公示
- 文部省「初等教育資料 1988年1月号」東洋館
- 加納誠司「生活科で新設された内容『(8)生活や出来事の交流』が意味するもの」、『せいかつか&そうごう』第16号 日本生活科教育学会 2009年 pp.4-11
- 文部省「解説 小学校教育の改善の方向 生活科」初等教育資料 東洋館 昭和63年2月号 pp.28-31、56-69
- 波多野達二「生活科の成立過程と現状」～総合的な学習の時間との関連を中心に～、京都教育大学附属京都小・中学校教育実践研究紀要第11号 2011年
- 魚住忠久「生活科授業の探求と実践」1990年 黎明書房 p.194
- 木村吉彦『小学校新学習指導要領の展開』生活科編 明治図書 2008年11月
- 寺本潔「教科力シリーズ小学校生活」初版第1刷発行 2016年2月